

JAPANESE JOURNAL OF PUBLIC HEALTH

日本公衆衛生雑誌

第55巻・第10号 特別附録 平成20年10月

第67回日本公衆衛生学会総会抄録集

福 岡

日 本 公 衛 誌
Jpn J Public Health

日 本 公 衆 衛 生 学 会
Japanese Society of Public Health

10

特別附録

02-033

女子学生における食環境についての研究(2)

○佐藤 仁美¹⁾、坂口 早苗²⁾、近藤 陽一³⁾、坂口 武洋²⁾西武文理大学¹⁾、川村学園女子大学²⁾、山野美容芸術短期大学³⁾

【目的】食の欧米化、女性の社会進出によるライフスタイルの変化、流通の発展による食の外部依存、若い女性のダイエット、欠食等、食に関する議論が盛んに交わされている。そこで、次世代の健康保持・増進をも担うであろう女子学生を対象に、食環境を把握する目的で質問紙調査を実施した。【方法】調査対象者は関東地方の7つの大学・専門学校に在籍する女子学生612名である。当該教育機関に質問紙調査の承諾を得て、教員を通じて質問紙の配布・回収を行った。実施時期は平成18年9月26日～12月22日と平成19年9月18日～25日であり、回収率は90.0%であった。質問項目は、居住形態、調理・欠食・共食状況等の食に関する内容である。【結果】調査対象者は女子学生551名であり、年齢の内訳は20歳未満239名(43.4%)、20～24歳254名(46.1%)、25歳以上55名(10.0%)、未記入3名(0.5%)、平均年齢は20.9±4.6歳であった。居住形態は「家族と同居」73.5%、「一人暮らし」17.6%、「寮」6.5%、「その他」2.4%であった。主な調理者は「母親」60.6%であり、自分で調理する頻度は、「毎日」21.2%、「週に1回」20.5%であった。毎日調理する者は、「一人暮らし」59.8%、「家族と同居」10.6%、「寮」30.6%、「その他」38.5%であった。食事の状況では、朝食欠食の割合は15.1%、孤食の割合は58.6%、手作りの昼食の割合は50.3%であった。夕食を家族全員で食べる割合は19.2%であり、家族と同居の学生では、「家族全員」24.4%、「家族の誰かと」55.3%、「孤食」12.3%であった。栄養バランスを「毎食考慮する」者は13.6%、「時々考慮する」者は71.5%であり、食事状況に「満足している」者は21.1%、「ある程度満足している」者は49.0%であった。生活習慣等については、喫煙率10.2%(未成年7.1%、成人12.7%)、飲酒率47.2%(未成年24.8%、成人65.3%)、ストレスをいつも感じている者は25.0%、睡眠時間が5時間以下の者は31.0%であった。【まとめ】高等教育機関で学んでいる女子学生に対し、食環境について質問紙調査を実施したところ、現在の食事状況に満足・ある程度満足している学生が大半を占めた。栄養バランスについて毎食考慮する学生は少なかったが、時々考慮する学生が多く見られた。未成年でも喫煙や飲酒をする学生はいたが、全体的に食について関心を持っていることがうかがわれた。

02-034

女子会社員の生活習慣と規範意識

○山野 紗理¹⁾、佐々木 菜摘²⁾、坂口 早苗²⁾、坂口 武洋²⁾株式会社 アリミノ¹⁾、川村学園女子大学 大学院²⁾

【目的】現代社会はめまぐるしく変化し、子どものみならずキレる大人が出現し、規範意識の崩壊や変化などが問題視されるようになってきている。本研究では、女子会社員の生活習慣の実態を把握し、規範意識との関連性について調べることを目的とした。【対象および方法】関東にある3社で働く女子会社員191名を対象に2007年3月～6月にかけて、無記名の自己記入方式で調査した(回収率は78.0%)。調査項目は、現在と子どもの頃の生活状況、日常生活の規範意識および生活習慣等である。【結果】女子会社員の年齢構成は20歳未満1人(0.7%)、20～24歳32名(21.5%)、25～29歳23名(15.4%)、30～34歳20名(13.4%)、35～39歳19名(12.8%)、40歳以上46名(30.9%)、未記入8名(5.4%)、総計149名であった。現在、一人暮らしをしている女子会社員は18人(12.1%)と少なく、祖父母との同居経験を有する者は67人(45.0%)であった。小児期における母親の就業状況については「以前より専業主婦」と答えた者は34.2%、「継続」と答えた者は36.9%、「育児のために退職」と答えた者は20.8%であり、子どもの頃、主にしつけてもらった人は「母親」(69.8%)であった。路上や電車の通路等に座る行為は、約1割の者が経験していた。路上等に座る人に対して「人の邪魔になる」「行儀が悪い」「体裁が悪い」と考えている者が約半数を占めた。電車内で化粧を「いつもする」者は0.7%、「時々する」者は8.7%、「ほぼしない」者は24.2%、「全くしない」者は65.1%であった。化粧をする理由で最も多かったのは「時間が無い」63.5%であり、しない理由として「羞恥心」38.1%、「体裁が悪い」33.0%などが挙げられた。電車の中で化粧をしている人が「大変気になる」者は22.8%、「やや気になる」者は49.0%、「あまり気にならない」者は14.1%、「全く気にならない」者は4.7%であった。高校時代に化粧経験を有する者は29.5%、ピアス経験がある者は53.7%であった。また、喫煙率は14.8%、飲酒率は83.2%、朝食摂取率は78.5%、栄養バランスを考慮している者は59.7%であった。【まとめ】女子会社員の生活習慣と規範意識について調査したところ、路上や電車の通路等に座る、電車内での化粧、高校時代の化粧およびピアス等の経験は、年齢が35歳未満と35歳以上の2群に区分すると、両者間に有意な関係が認められた。

02-035

高校生の偏食と Health Locus of Control との関連

○吉田 由美¹⁾、高木 廣文²⁾、稲葉 裕³⁾順天堂大学 医学部 衛生学¹⁾、東邦大学 医学部 看護学科²⁾、実践女子大学 生活科学部³⁾

【目的】高校生の偏食と Health Locus of Control(以下 HLC とする)との関連を明らかにする。【方法】山梨県内の高校3年生相当者と母親を対象とした調査を2000年に実施した。本調査は1991年に小学校3年生と母親を対象に開始した健康行動と HLC に関する縦断調査の一部である。今回は高校3年生相当者の調査結果と小3、小6、中3時点の HLC の調査結果を用いた。高3時点の有効回答は男子60人、女子54人、合計114人である。調査協力の承諾者に調査票を郵送にて配布、回収した。偏食の程度、偏食と自分の健康との関係の有無について設問した。程度の設問は「食べ物に好ききらいがありますか。」であり、回答肢は1.ない、2.多少ある、3.きらいなものが多い、である。1.の回答を偏食無し、2、3の回答を偏食有りとした。HLC 尺度は小3、小6、中3時点は Parcel & Meyer の児童用 HLC 尺度の翻訳版、高3時点では、堀毛の日本版 HLC 尺度を用いた。前者は Internal(I), Powerful Others(P), Chance(C) の3つの下位尺度、後者には Internal, Professional(Pr), Family(F), Chance, Supernatural(S) の5つの下位尺度がある。下位尺度毎の得点を算出し、IHLC 得点、PHLC 得点、CHLC 得点、また、IHLC 得点、PrHLC 得点、FHLC 得点、CHLC 得点、SHLC 得点とした。分析は Wilcoxon の順位検定、 χ^2 検定を行った。【結果と考察】1. 偏食無しの者は、男子30.0%、女子7.5%で有意差が認められた。偏食が自分の健康と関係あると考えている者は、男子80.4%、女子83.3%で有意差はなかった。2. 男子女子共に、偏食の有無と偏食が自分の健康に関係が有るか無いかという意識には関連は認められなかった。3. 男子の場合、偏食無しの者は偏食有りの者より高3時点の IHLC 得点有意に高く、また、高3時点の CHLC 得点有意に低かった。4. 女子の場合、偏食無しの者は偏食有りの者より、中3時点の CHLC 得点有意に低かった。5. 以上のように、偏食に関して、HLC との関連が一部に認められた。Internal 傾向の者は External 傾向の者より、よい健康行動を身につけているとする説を支持する結果であった。

02-036

女子大学生のやせ志向と関連因子について

○若本 ゆかり¹⁾、中西 裕美子¹⁾、荒巻 輝代²⁾、後藤 政幸³⁾ノートルダム清心女子大学 人間生活学部 食品栄養学科¹⁾、宇部フロンティア大学短期大学部 食物栄養学科²⁾、和洋女子大学 家政学部 健康栄養学科³⁾

【目的】近年若い女性のやせ志向が問題となっている。女子大学生のやせ志向に関連する因子を検討し、栄養健康教育の一助とする。【方法】平成19年10月に女子大学生を対象に身体状況(現在の身長・体重・骨密度測定、理想体重調査)、生活習慣および食習慣調査を行った。現在の体重および理想体重からそれぞれ BMI を計算した。食品と栄養素摂取量はエクセル栄養君付属 FFQgVer.2.0 により算出した。対象者のうち、すべての調査データが揃った92人を解析対象とした。現在の BMI レベルによりやせ志向が異なると考えられるため、対象者を BMI19 未満24人(26.1%)の低群、19以上22未満51人(55.4%)の標準群、22以上17人(18.5%)の標準高群(以下高群)の3群に分類した。【結果】対象者全体の平均 BMI は 20.5±2.3、理想の BMI は平均 18.4±0.9 であった。OSI、現在の BMI、理想の BMI について3群間で有意差が認められた。理想の BMI は、低群と標準群および低群と高群には有意差が認められ、低群の理想の BMI は他の2群よりさらに低かった。また群内で現在の BMI と理想の BMI とを比べたところ、標準群および高群で有意差が認められた。現在と理想の BMI との差は標準群で-2.1、高群では-5.0であった。音響的骨評価値(OSI)は高群と低群および高群と標準群に有意差が認められた。理想とする体重は、低群は「過去の体重」、標準群は「BMI」、高群は「同じ年代の友人」が多く、このうち「過去の体重」では3群の BMI 分類と有意な関連が認められた。栄養や健康に関する情報源は「テレビ」が最も高かったが、標準群では「雑誌・本」、高群では「インターネット」がそれぞれ他の2群より高かった。ダイエット経験者の割合は低群が最も低かったが、ダイエットによる減量(3～5kg)は他の2群より高かった。低群の現在の BMI は、減量の結果とも考えられる。【考察】女性の骨密度と BMI との関連については多くの報告がある。ダイエットを行った時期は BMI が高い群ほど年代が早い傾向にあり、無理な減量は将来的な骨密度への影響のみならず、成長期の健全な発育への支障も懸念される。「理想」とする体重の基準や、情報源が異なっていたことから、やせ志向の改善には、「理想」と判断する際の情報源の種類や内容についてさらに検討し、栄養健康教育に取り入れる必要があると思われる。